

新編 国歌大観

第六卷 私撰集編Ⅱ

歌集



角川書店

新編国歌大観 第六卷

私撰集編Ⅱ 歌集

昭和六十三年四月二十日 初版発行
平成五年十一月三十日 再版発行

編者 「新編国歌大観」編集委員会

発行者 角川歴彦

発行所 株式会社角川書店



東京都千代田区富士見二―十三―三 郵便番号一〇二 振替東京三―一九五二〇八
電話 営業部〇三―三八一七―八五二一 編集部〇三―三三二二―一五二〇

印刷・製本所 凸版印刷株式会社

© Printed in Japan ISBN4-04-020162-0 C3592

落丁・乱丁本はご面倒でも小社角川ブック・サービス宛にお送りください。送料は小社負担でお取り替えます。

凡 例

①『新編国歌大観』第六卷私撰集編Ⅱ歌集部に収める各集は、原則として、広く一般に流布している系統の中から最善本（切として残存するものを含む）を選んで、底本とした。

②本文作成にあたっては、底本を尊重したが、利用の便をはかって、以下のような校訂を加えた。

①底本における和歌本文の偶然的な脱落・衍字・誤写などが他本によって修正しうる場合は校訂を行なった。

②底本の歌順が明らかに誤りと認められる場合は、他本によって訂し、その旨を解題に記した。

③底本に存するミセケチなどは表示せず、原則として訂正結果に従った。また底本に存する記号・注記・校異の類は、作品成立時もしくはそれに近い時期に加えられたと判断される場合にのみそのまま残し、他は原則として省略した。

④本文が孤本・稀本であるため他本によって校訂本文を作成しえぬ場合は、書写の誤りと見られる部分の右傍に（ママ）と注した。

⑤本文が判読しえぬ場合は字数分の□を用いることとし、長文で字数不明の場合は「」によって表示した。

⑥本文に和歌・詞書等の脱落があり、何行分かの空白がある箇所には、（空白）と表示し、また何字分かの空白がある場合は、

その部分を「」の記号により表示した。なお檜葉和歌集巻七以降には、底本に「朽」「損滅」などの文字があるが、それは「」に入れて記し、その文字の前後に空白がある場合は、ほぼその字数分を空白とした。

⑦古筆切および錯簡のある本で、各紙の接続が不明の場合は、その間を※ ※によって示した。すなわち次の場合である。

⑦継色紙集・如意宝集・麗花集など、古筆切を集成した集において、各切間の接続関係が不明もしくは断定し難い場合。

①秋萩集における第一紙と第二紙とのあいだ。

②別本和漢兼作集・人家和歌集・松花和歌集のように著しく錯簡を持つ本文においては、推定による復元本文を作成したが、復元が困難で、連接が不明の場合。

⑧継色紙集・如意宝集・麗花集において、各切間が、あきらかに接続しているとみられる場合はその箇所に『を挿入し、続けた。

⑨人家和歌集において、作者名表記の欠脱が想定される箇所は、歌または歌題の前に☆ ☆を記した。

⑩奥書・識語の類は、その集の撰者が自ら書いたと認められるもの以外は原則として省略した。ただし撰者以外の奥書・識語も、必要に応じてこれを解題に掲げた。

④各集ごとに、和歌・漢詩句の別なく、その歌頭（句頭）に通し番号を打った。ただし本文中に、改行等の形で独立表示されているものに限った。

⑤表記は底本のそれができるだけ尊重したが、よみやすさへの配慮から、次のような処置をとった。

①いわゆる変体仮名は普通の平仮名に改めた。

②異体・別体の漢字は通行の字体に統一した。

③仮名遣いは歴史的仮名遣いに統一した。ただし字音語のうち、物名歌など特別の場合は底本通りの表記とした。

④活用語などの漢字表記については、必要に応じて最少限の送り仮名を加えた。

⑤漢字表記の助詞・助動詞は原則として平仮名に改めた。その他特異な宛字で平仮名に改めたものがある。

⑥反復記号は用いなかった。

⑦清濁は区別して示したが、清濁をこえた掛詞として用いられるものについては、原則として清音とした。

⑧和歌の難読字にはふり仮名をつけた。

⑨序・詞書・左注には適宜読点を打った。

⑩以上のほか、底本の形態にかかわらず、例えば和歌は一行書き、長歌は句ごとに一字あきなどの処置をとった。

⑪和漢兼作集・別本和漢兼作集について

①漢詩句の表記は底本のそれができるだけ改変しなかったが、同字で常用漢字のあるものはそれを用いた。なお以下にいう漢詩句とは、一編の詩の全形と一句ないしは数句を抜き出した形（いわゆる摘句）とを称する。

②漢詩句の句間は二字あけとし、右側に平仮名で最も妥当と思われる傍訓を施した。

③漢詩句・題名・出典注記などには返り点・送り仮名は付さなかった。

④章節・題名・漢詩句・和歌などの字下げは底本の形にこだわらず一定の形に揃えた。

⑤解題は、その集および底本に関する基本的な事実を述べたほか、重要な校訂箇所などを記すにとどめた。

⑥索引に関しては索引部凡例を参照されたい。

第六卷 私撰集編Ⅱ 略称一覧

金葉和歌集初度本	1 金葉初	雲葉和歌集	11 雲葉集	柳風和歌抄	21 柳風抄	麓のちり	33 麓ちり
秋萩集	2 秋萩集	別本和漢兼作集	12 別兼作	続現葉和歌集	22 続現葉	難波捨草	34 難波捨
継色紙集	3 継色紙	新和歌集	13 新和歌	松花和歌集	23 松花集	鳥の迹	35 鳥の迹
如意宝集	4 如意宝	東撰和歌六帖	14 東撰六	臨永和歌集	24 臨永集	新明題和歌集	36 新明題
麗花集	5 麗花集	東撰和歌六帖拔粹本	14' 東六拔	藤葉和歌集	25 藤葉集	霞関集	37 霞関集
御裳濯和歌集	6 御裳集			安撰和歌集	26 安撰集	八十浦之玉	38 八十浦
檜葉和歌集	7 檜葉集	人家和歌集	15 人家集	六華和歌集	27 六華集	大江戸倭歌集	39 大江戸
現存和歌六帖	8 現存六	和漢兼作集	16 和漢兼	津守和歌集	28 津守集		
現存和歌六帖拔粹本	8' 現六拔	閑月和歌集	17 閑月集	菊葉和歌集	29 菊葉集		
		遺塵和歌集	18 遺塵集	新三井和歌集	30 新三井		
秋風抄	9 秋風抄	続門葉和歌集	19 続門葉	題林愚抄	31 題林愚		
秋風和歌集	10 秋風集	拾遺風体和歌集	20 拾遺風	林葉累塵集	32 林葉累		

第六卷 私撰集編Ⅱ 歌集目次

金葉和歌集初度本（静嘉堂文庫蔵本）	九	（歌集ページ）	九三三
秋萩集（東京国立博物館蔵本＊）	一九		九三四
継色紙集（継色紙＊）	一九		九三五
如意宝集（古筆断簡＊）	二〇		九三五
麗花集（古筆断簡＊）	二二		九三五
御裳濯和歌集（天理図書館蔵本）	二六		九三六
檜葉和歌集（上巻 尊経閣文庫蔵本 下巻 天理図書館蔵本）	三六		九三七
現存和歌六帖（国書遺芳所収本＊）	五八		九三八
同 抜粹本（永青文庫蔵本）	七四		九三八
秋風抄（群書類従本）	八一		九四二
秋風和歌集（宮内庁書陵部蔵本）	八九		九四二

雲葉和歌集（内閣文庫蔵本） （彰考館蔵本）	一九	九四三
別本和漢兼作集（島津忠夫氏蔵本）	一三九	九四五
新和歌集（彰考館蔵本）	一五三	九四六
東撰和歌六帖（島原松平文庫蔵本）	一七〇	九四七
同 拔粹本（祐徳中川文庫蔵本）	一七七	九四七
人家和歌集（大倉精神文化研究所蔵本）	一八六	九四八
和漢兼作集（宮内庁書陵部蔵本）	一九六	九四九
閑月和歌集（文化庁蔵本*）	二一七	九五〇
遺塵和歌集（宮内庁書陵部蔵本）	二三九	九五一
続門葉和歌集（東大寺図書館蔵本）	二三六	九五二
拾遺風体和歌集（有吉保氏蔵本）	二五八	九五三
柳風和歌抄（内閣文庫蔵本）	二六八	九五四
続現葉和歌集（群書類従本）	二七二	九五四
松花和歌集（内閣文庫・国文学研究資料館 住吉神社・久曾神昇氏蔵本）	二八八	九五五
臨永和歌集（神宮文庫蔵本）	二九四	九五八
藤葉和歌集（群書類従本）	三一〇	九五九

安撰和歌集（静嘉堂文庫藏続群書類従本）	三三三	九六〇
六華和歌集（島原松平文庫蔵本）	三三四	九六一
津守和歌集（千葉義孝氏蔵本）	三七〇	九六二
菊葉和歌集（宮内庁書陵部蔵本）	三七六	九六三
新三井和歌集（有吉保氏蔵本）	四〇五	九六三
題林愚抄（寛永十四年板本）	四一三	九六四
林葉累塵集（寛文十年板本）	六四八	九六六
麓のちり（天和二年板本）	六七六	九六六
難波捨草（宮内庁書陵部蔵本）	六八九	九六七
鳥の迹（元禄十五年板本）	七〇八	九六七
新明題和歌集（宝永七年板本）	七二三	九六七
霞関集（寛政十一年板本）	八二三	九六八
八十浦之玉（天保四年・文政十二年・天保七年板本）	八四三	九六九
大江戸倭歌集（安政七年板本）	八九〇	九七〇

全十巻収載作品一覧

*印 影印・複製による

九七二

新編国歌大観

第六卷 私撰集編Ⅱ

歌集

金葉和歌集初度本

〔1金葉初〕

金葉和歌集巻第一

春部

百冊七首

歳中立春ころをよめる

紀貫之

一としのうちに春たつことを春日野の「」なきへにもしりにけるかな

「」ひしがしりきたるといふ「」める 覚雅法師

二「」のはじめの歌とてよめる 源俊賴朝臣

三いつしかとききはこほりもとけにけりいかでみぎはに春をしるらん

天徳四年内裏歌合に読める 中納言朝忠

四くらはしの山のかひよりはるがすみとしをつみてやちわたるらん

平兼盛

五ふるさとはるめきにけりみよしののみかきがはらも霞みこめたり

かすみのころをよめる 大宰大貳長実

六あつさゆみ春のけしきになりけりいるきの山にかすみたなびく

実行卿家歌合に霞の心を読める 少将公教母

七あさみどりかするものけしきにやときはのやまはるをしるらん

藤原頼朝朝臣

八としことにはあらぬものはるがすみたつたの山のけしきなりけり

堀川院御時 百首歌めしたるに霞の心をつかまつれる

源俊賴朝臣

九なみたてるまつのしづえをくもでにてかすみわたれるあまのはしだて

む月のついたりころ、ゆきのふり侍りけるを見てつかはしける

修理大夫顯季

一〇あらたまのとしのはじめにふりしけばはつゆきとこそいふべかりけれ

返し 春宮大夫公実

一一あさとあけて春のこずゑの雪みればはつ花ともいふべかららん

はるのゆきをよめる 曾禰好忠

一二ゆきえはるのわかばもつむべきにはるさへはれぬみやまへのさと

源順

一三こほりだにとまらぬはるのたにかせにまだうちとけぬうぐひすのこゑ

「四わがやとにうぐひすいたくなくなるをにはもはだに花やちるらん

はじめてうぐひすをきくといへる「」とをよめる 平兼盛

「五けふよりやむめのたちえにうぐひすのこゑとなるははじめなるらん

修理大夫顯季

「六うぐひすのなにくつてやまがねふくきびのなやまはるをしるらん

む月の八日春のたちけるに、鶯のなきけるをききて 源俊賴朝臣

「七けふやさはゆきうちとけて鶯の宮にいつるはつねなるらん

皇后宮にて人歌つかまつりけるに、雨中鶯といへる事を読める

源俊賴朝臣

「八春さめにふりしむれともうぐひすのこゑはしれぬものにさりける

おなじころをよめる 藤原為真

「九うぐひすのむめのはながさちりぬればふる春さめにそほちてぞなく

晚間鶯といへる事をよめる 源俊賴朝臣

「一〇うぐひすのこづたふさまもゆかしきにいまひとこゑはあけはてなけ

天徳四年内裏歌合に読める 中納言朝忠

「一二わがやどのむめがえになくうぐひすはかせのたよりにそをよめにし

平兼盛

「三しろたへのゆきふりやまぬ梅がえにいまぞうぐひすはるとなくなる

閑路聞鶯といへる事をよめる 藤原頼朝朝臣

「三あふかにけふもとまりぬうぐひすのなく一こゑやはるはせきもり

良運法師しのびてもへまかりけるに、左大弁経頼家の梅のさかり

いにきたたりければ、かどにひねむすにたくらして、ゆふがた

いひれ侍りける 良運法師

「四むめの花にはふあたりはよきてこそいそぐみちをばゆくべかりけれ

梅香夜薫といへる事を読める 前大宰大貳長房

「五むめがえに風やふくらんはるのよはをらぬそでさへにほひぬるかな

朱雀院に人入まかりて閑庭梅花といへることをよめる 大納言経信

「六けふここにみにこざりせばむめのはなひとりや春のかせにちらまし

道雅卿家の歌合にむめのはなをよめる 藤原兼房朝臣

「七ちりかかればはみゆれどむめのはなみづにはかこそうつらざりけれ

源雅兼朝臣

「八さけはるこずゑのみかはむめのはなながるる水もとまらざりけり

鷹司殿賀屏風に、子日したるかたけることをよめる 赤染

「九よろづよのためしにきみがひかるればねのびのまつもうらやみやせん

子日のころをよめる 大中臣公長朝臣

「一〇春日ののねのびのまつはひかてこそかみさびゆかんかけにかくれめ

百首歌中にわかなの心をよめる 曾禰好忠

「三ぬざりつむ春のさだににおりたちてひくものすそのぬれぬ日ぞなき

屏風の絵に、をんなごものわかなつめるところをよめる 紀貫之

「三わかなつむわれを人みばあさみどり野べのかすみもたちかくきなん

亭子院歌合に読める 坂上是則

「三あさみどりそめてみだれるあをやぎのいとをば春の風やとくらん

天徳四年内裏歌合に柳をよめる 平兼盛

「三さはひめのいとそめかくるあをやぎをふきなみだりそ春の山風

柳緑随風 院御製

「三かぜふけばやなぎのいとのかたよりになびくにつけてすぐるはるかな

百首歌中に柳をよめる 春宮大夫公実

「三あさまだきふくるかせにまかすればかたよりしけりあをやぎのいと

池岸柳をよめる 源雅兼朝臣

「三風ふけばなみのあやするいけ水にいとひきそふるきしのをやぎ

忠義公家歌合によめる 読人不知

「三たにがはのふきあげにたてる玉柳えだのいとまもみえぬはるかな

百首歌中に柳をよめる 源俊賴朝臣

「三もかりふねはつしめなはころせよかはそひやなぎきしになみよる

長実卿家の歌合に読める 源季遠

「四いかなればこほりはとくる山かげにむすぼはるらんあをやぎのいと

喚子鳥をよめる 前斎院尾張

「四いとこやまくる人もなきゆふぐれにころばそくもよこどりかな

静命法師

「四三山びこのたへざりせばよごどりむなしきねをやなきてすぎまし

春の歌とて読める 伊勢

「四うぐひすのなくねをまねふ山びこはともありがほにもとめつるかな

霞中帰雁をよめる 藤原成通朝臣

「四四こゑすはいかでしらましはるがすみへだつるそらにかへるかりがね

帰雁をよめる

藤原経通

四五 いまはとてこしちにかへるかりがねはねもたゆくやゆきかへるらん

雅定卿家歌合によめる 意尊法し

四六 たまづきをかけしをりやかりがねにはるかへりこちぎりそめけん
かへるかりをよめる 源忠季

四七 なかなかちるをみじとやおもふらはなのさかりにかへるかりがね
信永法師

四八 きりふかみこしかりがねぞかへるなるかすみのうちにこそばかりして
読人しらず

四九 見てもあかぬ花のさかりにかへるかりなほふるさとの春や恋しき
かすめるそらに、かへるかりのおとばかりしけるをきてよめる 慶経法師

五〇 ゆきかかるこしちは春もさむければかすみのころもきてかへるなり
花薫風といへることを 摂政左大臣

五一 よしの山みねのさくらやさきぬらんふものとこのきとにほふはるかぜ
白川花御幸 新院御製

五二 たづねつる我を花もまちつらんいまださかりににほひましける
太政大臣

五三 しらかはのがれひさしきやとなれば花のにほひものどけかりけり
人にかはりてよめる 大宰大貳長実

五四 ふくかぜも花のあたりはころせよけふをばつねの春とやは見む
待賢門院兵衛

五五 よろづ世のためしとみゆる花の色をうつしとどめよしらかはの水
源雅兼朝臣

五六 としことにきそふやどのさくら花なほゆくすゑのはるぞゆかしき
宇治前太政大臣の家御幸 院御製

五七 はるがすみたちかへるべき空ぞなき花のにほひにころとまりて
遠山桜といへる事をよめる 春宮大夫公実

五八 しら雲とちのたかねのみえつるは心まどはすくらなりけり
新院御方にて、風なくして花るといふ事をよめる 大宰大貳長実

五九 うつろへばおのがころとちるはなをさのみは風におほせざらん
花をよめる 右兵衛督伊通

六〇 しら雲とみねにはみえてさくら花ちればふものゆきこそなれ
松間桜花といへる事を 内大臣

六一 春ごとにまつのみどりにうづもれてかぜにしらねはなざくらかな

六二 この春はのどかにほへさくらばなえださしかはす松のしるしに
左兵衛督実能

六三 山見花といへることをよめる 大宰大貳長実

六四 やまざくらこすゑの風のさむければはなのさかりになりぞわづらふ
花為春友といへる事をよめる 内大臣

六五 ちらぬまはなをともにてすぎぬべしはるよりのちのしる人もがな
新院御方にて花契返年といへる事をよめる 待賢門院中納言

六六 しらくもにまがふさくらこのすゑにてちとせの春をそらにするかな
藤原頼朝朝臣

六七 よろづ代にみるべきはなのいろなれどけふのにほひはいつかわすれん
終日尋花といへる事をよめる 源貞亮朝臣

六八 しら雲にまがふさくらをたづねとてかからぬやまのなりつるかな
堀川院御時、女房たちを花山のはなみせにつかはしたりける、か
へりまゐりて御前にて人うたつかうまつりけるに、女房にかは
りてよませ給ひける 堀川院御製

六九 よそにてはいはこすたきとみゆるかなみねのさくらやさかりなるらん
七〇 けふくれぬあすもきてみんさくらばなころしてふけはるのやまかぜ
源俊頼朝臣

七一 かがみ山うつろふはなをみてしよりおもかげのみたぬ日ぞなき
大宰大貳長実

七二 桜歌十首よませ侍りけるに
修理大夫頼季

七三 さくら花さきぬる時はよしのやまたちものぼらぬみねのしらくも
行路花といへる事をよめる 源忠季

七四 やまざくらみねは霞のこめつればふものと花ををりてこそ見れ
彼山住僧永慶法師

七五 ちりつもるにはをぞままし桜花風よりさきにたづねざりせば
宇治前太政大臣家歌合に読める 皇后宮摂津

七六 やまざくらさきめしよりひさかたの雲に見ゆるたきのしらいと
源俊頼朝臣

七七 はつせ山雲あに花のさきぬればあまのかはなみたつかとぞみる
大藏卿匡房

七八 上落花と云へる事をよめる 瞻西上人

七九 ちるはなのながるる水につもらぬもそれさへゆきのこちこそすれ
花をよめる 藤原経資

八〇 かつ見つつかずとおもへばさくらばなちりなんのちぞかねて恋しき
堀川院御時、女御殿女房あまたぐして花見ありけるによめる 前斎宮筑前乳母

八一 春ごとにあかぬにほひをさくらばなかななる風ののこちこそすれ
人にかはりてよめる 僧正行尊

八二 よそにてはをしみにきつる花なれどをらではえこそかへるまじけり
後冷泉院御時皇后宮歌合にさくらをよめる 堀川右大臣

八三 春さめにぬれてたづねん山さくら雲のかへしのあらしもぞふく
月前見花といへる事をよめる 大藏卿匡房

八四 月かげにはなみる夜のうきくもは風のつらさにおとらざらまし
円融院に人人あまたまかりて、翫花といへることをよめる 中納言頼隆

八五 ちればゆきちらねば雲とみえつるはさかりににほふさくらなりけり
花をよめる 大宰大貳長実

八六 春の日ののどけき空にふるゆきは風にみだるるはなにざりけり
水上落花といへることをよめる 源雅兼朝臣

八七 はなさそふあらしやみねをわたらんさくらなみよるたにがはのみづ
落花満庭といへることをよめる 左兵衛督実能

八八 けさみればよはのあらしにちりててはこそ花のさかりなりけれ
堀川院御時、中宮御方にて風静花香といへる事をよめる 源俊頼朝臣

八九 木ずゑにはふくともみえてさくらばなをるぞ風のしるしなりける
顕季卿家にて桜花歌十首人読みけるによめる 藤原頼朝朝臣

九〇 をしむともいくもあらじさくらばなころのままにをりてかへらん
落花の心をよめる 長実卿母

九一 はるごとにおなじさくら花なればをしむ心もかはらざりけり
九二 ちるさくらばなはたのむれ木にまたさくら花となりけるかな
落花随風といへることをよめる 右兵衛督伊通

九三 うらやましいかにふけばか春かぜのはなを心にまかせそめけん
水上落花をよめる 藤原成通

九四 水のおもにちりつむ花を見る時ぞはじめてかぜはうれしかりける

大納言経信

九五みなかみにはなやちるらん山がはのくひにいとどかかるしらなみ
落花散衣といへる事をよめる 藤原永実

九六ちりかかるけしきはゆきの心ちしてはなには袖のぬれぬなりけり
堀川院御時 花のちりたるをかきあつめて、おほきなる物のふた
に山のかたにつませ給ひて、中宮の御方になてまつらせたまひた
りけるを、宮の御覧してうたよめとおほせられければつまつれ
る 御匣殿

九七さくらばなくもかかるまでかきつめてよしののやまとけふはみるかな
題不知 凡河内躬恒

九八おきふしてをむかひなくうつつにもゆめにも花のちるよなりけり
天徳四年内裏歌合によめる 大中能宣朝臣

九九さくらばな風にしらぬものならばおもふことなき春にぞあらまし
はなにはかにちりつもりたるを見てよめる 郁芳門院安芸

一〇〇にはのなものとこのすゑにふきかへせしらすのみやはころなるべき
夜思落花といふ事をよめる 経源法師

一〇一ころもでにひるはちりつむさくら花よるはころにかるなりけり
百首歌中に春の歌として読める 源重之

一〇二はなざくらつもれるにはに風ふけばふねもかよはぬなみぞたちける
雨中見花といへる事をよめる 藤原親経

一〇三おしなべてかぜをのみやはいとふきぬるははなのをしらぬかは
はるものへまかりけるに、小田つくりけるを見て読める 高階成朝臣

一〇四さくらさくやまだをつくるしづのをはかへすがへすやはなをみるらん
はなのちるをみてよめる 凡河内躬恒

一〇五さくらばなりぬるときはみもはてでさめぬるゆめの心地こそすれ
後冷泉院の御時、月あかりける夜女房たちをかりて南殿にわた
らせ給ひたりけるに、庭の花つもりておもしろくしてを御覧じ
て、これをしたらん人にみせばやおほし事ありて、中宮御方
に下野やあらんとてめしにつかはしたりければ、まゐりたりける
を御覧じて、あのはなをりてまゐれとおほし事ありければける
まゐりたるを、ただにはいかがおほし事ありければつまつれ
る 下野

一〇六ながきよの月のひかりのなかりせば雲ゐのはなをいかでをらし
三月三日桃花をよめる 経信卿母

一〇七やまがつそのふにさけるものはなすけりなこれをうゑて見けるも

春夜月をよめる

一〇八はなちらばおきつとも見むつねよりもさやかにてらせはるのよの月
春駒をよめる 藤原盛経

一〇九とりつなぐ人もなきのはるごまはかすみにのみやたなびかるらん
百首歌中にききつばたをよめる 修理大夫顯季

一一〇あづまのかはやぬまのかきつばたはるをこめてもさきにけるかな
春田を読める 大納言経信

一一一あらをたはそたにがはをまかすればひくしめなはにもりつぞゆく
後冷泉院御時弘徽殿女御歌合に、なほしものころをよめる 藤原経資

一二二やまざとのそとものをだのなはしるにいほまもみづをせかぬ日ぞなき
苗代をよめる 津守国基

一二三しののゝ野ざはのを田をうちかへしたねまきてけりしめはへて見ん
家のやまぶきを人々あまたまうでて、あそびけるついでにをり
けるをみて 中納言雅定

一二四わがやどにまたこん人もみるばかりをりやつしそ山ぶきのはな
水辺歌冬 摂政左大臣

一二五かぎりありてちるだにをしき山ぶきをいたくをりそめでのかはなみ
おなじ心をよめる 大宰大貳長実

一二六はるふか神なみかはにかけみえてうつろひにけりやまぶきのはな
花山院御時の歌合によめる 大中能宣

一二七ひとへだにあかぬころをいとしくやへかさなれる山ぶきのはな
藤原惟成

一二八かはづなくみでのわたりにこそなめてゆきてにも見むやまぶきの花
麗景殿女御歌合に読める 読人不知

一二九やへさけるかひこそなけれやまぶきのちらばひとへもあらじと思へば
後冷泉院御時の歌合に山ぶきをよめる 前大宰大貳長房

一三〇やまぶきをふくく風も心あらばやへながらをやちらさならん
晩見瀧園といへる事をよめる 摂政左大臣家参府

一三一いひさすゆふくれないなみいろはえてやましたてすいはつじかな
院北面にて橋上藤花といへる事をよめる 大夫典侍

一三二色かへぬ松によそへてあづまのときははしにかるふちなみ
藤花をよめる 藤原頼朝臣

一三三むらさきのいろのゆかりにふちの花かかれるまつもむつまじきかな
家のふちのさかりなるを見て読める 律師増覚

一三四くる人もなきわがやどの藤のはなをまつてさきかからん

中務

紫藤蔵松といへる事をよめる

一三五まつかぜのおとせざりせばふちなみをなにかれるはなとしらまし
二条関白家にて池辺藤花といへる事をよめる 大納言経信

一三六いけにひつまつのひえにむらさきのなみおかりくるふちさきにけり
百首歌中に藤花をよめる 修理大夫顯季

一三七すみよしのまつにかれるふちのはなかげのたよりになみやおるらん
雨中藤花と云へる事を読める 神祇伯頭仲

一三八ぬるさへうれしかりけりはるさめにいろますふちのしづくとおもへば
やよひのつごもりにふちの花を見てよめる 中務

一三九ふちのはなさくを見つてゆく春はうしろめたくやおもはざるらん
隣家藤花といへる事をよめる 内大臣家越後

一四〇あしがきのほかとはみれどふちのはなにはははれをへだてざりけり
藤原盛致

一四一はなのみやくれぬる春をかた身とてあをばがしたにちりのころらん
三月尽のころをよめる 藤原成朝臣

一四二いくかへりけふに我が身のあひぬらんをしむは春のすぐるのみかは
大僧都証観

一四三はるのゆくみちにきむかへほどとぎすかたらふこゑにたちやとまると
源雅光

一四四わりなきはけふのみとおもふはるの日のやまのはかくなるにぞありける
三月尽寄恋心を 内大臣

一四五はるををし人はこよひとたのむればおもひわづらふけふのくれかな
摂政左大臣

一四六ゆくはるのすがたにみえぬものなればひきだにえこそとめざりけれ
中納言朝忠

一四七はなだにもちたてわかるるはるならばいとくけふとをけるにしまらし
摂政左大臣家にて、人人に三月尽の心をよませ侍りけるに読める 源俊頼朝臣

一四八かへるはるうづきいみにきしこめてしばしみあれのほどまでも見む
重服に侍りけるとし、三月尽心を読める 藤原頼朝臣

一四九おもひやれめぐりあふべきはるだにもたちわかるるはかなしきものを

良暹法師

金葉和歌集卷第二

夏部 九十一首

卯月のついたちの日、更衣のころをよめる

源師賢朝臣

一四〇 われのみぞいそぎたれぬなつころもひとへにはなををしむ身なれば
二条閑白家にて、人人余花のころをよませ侍りけるによる

藤原盛房

一四二 なつやまのあをばまじりのおそさくらはつはなよりもめづらしきかな
おなじころをよめる

皇后宮肥後

一四三 はるはいかにちぎりおきてかすぎぬるとおくれてはふはなにとはばや
応徳元年四月、三条内裏にて庭樹結葉といへることをよませ給ひける

院御製

一四四 おしなべてこずあみどりになりぬればまつのちとせもわかれざりけり

大納言経信

一四四 たまがしにはもはびろになりけりこやゆふしでて神まつるころ
天徳四年内裏歌合に夏草をよめる

王峰忠見

一四五 なつぐさのなかつゆけみかきわけてかる人なしにしけるころかも
鳥羽殿にて人人歌つかまつりけるに、卯花のころをよめる

春宮大夫公実

一四六 ゆきのいろをぬすみてさける卯の花にをのきと人ふゆこもりすな
卯花連牆といへる事をよめる

大藏卿匡房

一四七 いづれをかわきてとはましまぎとのかきねつづきにさける卯花
摂政左大臣

源相方朝臣

一四八 卯花のさかぬかきねはなれどもなにながれたるたまがはのさと
卯花廻牆といへる事をよめる

中納言実行

一四九 としをへてかよひなれにふるさとのかとどふばかりさける卯花
卯花誰誰といへる事をよめる

江侍従

一五〇 神やまのふもとにさけるうのはなはたがしめゆひしかきねなるらん
卯花をよめる

大納言経信

一五一 ゆきとしもまがひもはず卯花はくるれば月のかげかとも見ゆ
二五二 しづのめがあしびたくやも卯花のさきしかかれはやつれざりけり

源盛清

一五三 うの花をおとなしがはのなみかとしてねたくもをらすにけるかな

藤原季通朝臣

一五四 みる人のたちしとまればうのはなのさけるかきねやしら河のせき
郭公の歌十首人人によませ侍りけるついでに

摂政左大臣

一五五 ほととぎすがたはみづにやどれどもこゑはうつらぬものになぞありける
鳥羽殿歌合にほととぎすの心をよめる

修理大夫顯季

一五六 やまいでまだ人なれぬほととぎすたびのそらなるねをやくらん
郭公をたづぬといへる事をよめる

藤原節信

一五七 ふもまたたづねくらしつほととぎすいかできくべきはつねなるらん
ほととぎすをたづねける日えきか、二日ばかりありてなきければ

橘成元

一五八 ほととぎすおとはの山のふもとにてたづねしこゑをこよひきくかな
摂政左大臣家にて、人人ほととぎすの歌十首つよませ侍りける

源雅光

一五九 ほととぎすなきつとかたるひとつのこゑはさへぞうれしかりける
に

藤原重基

一六〇 すみよしのまつとしりせばほととぎすうらみぬききにおとづれてまし
長実卿家歌合に読める

左京大夫経忠

一六一 としごとくにきくはすれどほととぎすこゑはふりせぬものにぞありける
待公、内裏歌合に読める

内大臣

一六二 恋すてふなきなやたなんほととぎすまつにねぬよのかずしつもれば
天徳四年内裏歌合読める

坂上望城

一六三 はのかにぞなきわたるなるとときすみやまをいづるけさのはつこゑ
鳥羽殿歌合に読める

大宰大貳長実

一六四 むかしよりきけんものをほととぎすふりにしこゑといふ人のなき
郭公を読める

藤原顯輔朝臣

一六五 ほととぎす心もそらにあくがれてよがれがちなるみやまへのさと
承暦二年内裏歌合に、かはりてよめる

藤原孝善

一六六 ほととぎすあかてすぎにしこゑによりあどなきそらをながめつるかな
ほととぎすをよめる

権僧正永縁

一六七 きくたびにめづらしければほととぎすいづもはつねのこゑこそすれ
一六八 まちかねてたづねざりせばほととぎすたれとかやまのかひになかまし

源俊頼朝臣

一六九 いなり山たづねやみましほととぎすまつにしるしのなきかとおもへば
郭公をまつといへるころをよめる

大中臣公長

一七〇 雲外郭公といふ事を院の文殿にてよめる

藤原顯業

一七〇 そらになる心のきかばほととぎす雲のよそにはおもはざらまし
郭公を読める

清原深養父

一七一 みわの山すぎがてになけ郭公たづぬるけふのしるしとおもはん
王峰忠峰

一七二 ふるさはこだかれどもきみならぬほととぎすにもうとまれにけり
郭公をまつといへるころをよめる

院御製

一七三 ほととぎすまつにかかりてあかすかなふちの花とや人のみつらん
郭公驚夢といへる事をよめる

中納言実行

一七四 おどろかすこゑなかりせばほととぎすまたうつつにはきかずあらし
俊忠卿家歌合に時鳥を読める

二条閑白家筑前

一七五 まつ人のやどをばしらでほととぎすをちの山べをなきてすぐらん
一七六 ほととぎすほのめくこゑをいつしかとききまどはしつあけはののそら

中納言女王

一七七 やどちかくしばしかたらへほととぎすまつ夜のかずのつもるしに
時鳥をよめる

前斎院六条

一七八 ほととぎすまれにきく夜はやまびこのたふるさへぞうれしかりける
連夜待郭公といへる事をよめる

中納言雅定

一七九 ほととぎすまつよのかずはかきなれどこゑはつもらぬものにざりける
宇治前太政大臣家の歌合による

源俊頼朝臣

一八〇 山ちかく浦こぐふねはほととぎすなくわたりこそとまりなりけれ
匡房卿美作守にてくだりけるときに、みちに郭公のなをききよめる

康資王母

一八一 きもあへずこぎぞわかるほととぎすわがころなるふなでならねば
郭公をよめる

中納言高真

一八二 ほととぎすひとこゑなきてあけぬればあやなくよはのうらめしきかな
屏風の絵に、早苗とる人の郭公をきけるかたかけるころをよめる

藤原成通朝臣

一八三 ほととぎすなくなるこゑをさなへとてまうちやめてあはれとぞきく
月前郭公といへる事を読める

紀貫之

一八四 ほととぎすくものたえまにもる月のかけほのかにもなきわたるかな
晝間郭公といへる事をよめる

皇后宮式部

一八五 わきもこにあふさか山のほととぎすあくればかへるそらになくなり
時鳥を尋ぬといへる事を読める

源定信

一八六 ほととぎすたづぬるだにもあるものをまつ人いかでこゑをきくらん
雨中郭公といへることをよめる

大納言経信

一七ほととぎす雲ちにまよふこゑすなりをやみだにせよみだれのそら
独聞郭公といへる事をよめる 藤原 為忠

一八ねぎめする人またあらばほととぎすこれをきくやとほましのを
五月五日実能卿のもとに薬玉をつかはすとて 内 大臣

一九あやめぐさねたくもきみがとはぬかなけふはころにかれとおもふに
永承四年殿上根合にあやめを読める 大納言経信

二〇よろづ世にかはらぬものはさみだれのしづくにかをるあやめなりけり
郁芳門院の根合にあやめを 藤原 孝善

二一あやめぐさひくてもたゆくながきねのいかであさかのぬまにおひけん
承暦二年内裏歌合にあやめをよめる 春宮大夫公実

二二たまえにやけふのあやめはひきつらんみがけるやとのつともみゆるは
宮つかへしけるむすめの許に、五月五日くすだまをつかはすとて 権僧正永縁母

二三あやめぐさわが身のうきにひきかへてなべてならぬにおひもいでなん
五月五日、家に菖蒲をふくをみて読める 右近府生泰兼久

二四おなじくはとのへてふけあやめぐさみだれならばよりもこそすれ
むかし中院にすませ給ひける程にはみえりけるあやめを、人の 三 宮

二五あさしましやみしふるさとのあやめ草わがしらぬまにおひにけるかな
百首歌中にあやめをよめる 春宮大夫公実

二六あやめぐさよどのにおふるものなればねながら人はひくにやあらん
五月五日雨をよめる 参議師頼

二七あさみだれは日かずへにけりあづまのかがのきばのしたくつるまで
郁芳門院根合に五月雨の心を 六条右大臣

二八あさみだれにかさとりやまほこえゆかじはないろころもかへりもぞする
三 宮

二九さみだれにいりえのはしのうきぬればおろすいかだのこちこそすれ
承暦二年内裏歌合に五月雨をよめる 源道時朝臣

三〇さみだれにたまえのみづやまざるらんあしのしたばのかくれゆくかな
俊忠卿歌合にさみだれの心をよめる 藤原顯仲朝臣

三一さみだれにみづまきさきはまきのつぎはうきぬばかりに
閏五月侍りけるとし人をかたらひけるに、のちの五月すぐてな 橘 季通

三二さみだれにみづまきさきはまきのつぎはうきぬばかりに
どまじやりければよめる 橘 季通

三三さみだれにみづまきさきはまきのつぎはうきぬばかりに
どまじやりければよめる 橘 季通

三四さみだれにみづまきさきはまきのつぎはうきぬばかりに
どまじやりければよめる 橘 季通

三五さみだれにみづまきさきはまきのつぎはうきぬばかりに
どまじやりければよめる 橘 季通

三六さみだれにみづまきさきはまきのつぎはうきぬばかりに
どまじやりければよめる 橘 季通

三七さみだれにみづまきさきはまきのつぎはうきぬばかりに
どまじやりければよめる 橘 季通

三八さみだれにみづまきさきはまきのつぎはうきぬばかりに
どまじやりければよめる 橘 季通

三九さみだれにみづまきさきはまきのつぎはうきぬばかりに
どまじやりければよめる 橘 季通

四〇五月雨のころをよめる 源俊頼朝臣

四一五月雨のころをよめる 左兵衛督実能

四二五月雨のころをよめる 清原祐隆

四三五月雨のころをよめる 神祇伯顯仲

四四五月雨のころをよめる 源雅光

四五五月雨のころをよめる 藤原顯朝臣

四六五月雨のころをよめる 修理大夫顯季

四七五月雨のころをよめる 源俊頼朝臣

四八五月雨のころをよめる 橘俊綱朝臣

四九五月雨のころをよめる 源仲正

五〇五月雨のころをよめる 神祇伯顯仲

五一五月雨のころをよめる 藤原忠兼

五二五月雨のころをよめる 源俊頼朝臣

五三五月雨のころをよめる 中納言雅定

五四五月雨のころをよめる 紀貫之

五五五月雨のころをよめる 大中能宣朝臣

五六五月雨のころをよめる 中納言俊忠

五七五月雨のころをよめる 春宮大夫公実

五八五月雨のころをよめる 中納言俊忠

五九五月雨のころをよめる 中納言俊忠

六〇五月雨のころをよめる 中納言俊忠

六一五月雨のころをよめる 中納言俊忠

六二五月雨のころをよめる 中納言俊忠

六三やどことにはなたちばなぞにほふるひとつこずを風はふけども
月照夏草といへる心をよめる 藤原 定通

六四風ふけばしどろにみゆるくずのはのかけきだまらぬなのよの月
六月のついでこのころに、はたおりといふむしのなきけるをきき 江侍 從

六五風ふけばしどろにみゆるくずのはのかけきだまらぬなのよの月
六月のついでこのころに、はたおりといふむしのなきけるをきき 江侍 從

六六風ふけばしどろにみゆるくずのはのかけきだまらぬなのよの月
六月のついでこのころに、はたおりといふむしのなきけるをきき 江侍 從

六七風ふけばしどろにみゆるくずのはのかけきだまらぬなのよの月
六月のついでこのころに、はたおりといふむしのなきけるをきき 江侍 從

六八風ふけばしどろにみゆるくずのはのかけきだまらぬなのよの月
六月のついでこのころに、はたおりといふむしのなきけるをきき 江侍 從

六九風ふけばしどろにみゆるくずのはのかけきだまらぬなのよの月
六月のついでこのころに、はたおりといふむしのなきけるをきき 江侍 從

七〇風ふけばしどろにみゆるくずのはのかけきだまらぬなのよの月
六月のついでこのころに、はたおりといふむしのなきけるをきき 江侍 從

七一風ふけばしどろにみゆるくずのはのかけきだまらぬなのよの月
六月のついでこのころに、はたおりといふむしのなきけるをきき 江侍 從

七二風ふけばしどろにみゆるくずのはのかけきだまらぬなのよの月
六月のついでこのころに、はたおりといふむしのなきけるをきき 江侍 從

七三風ふけばしどろにみゆるくずのはのかけきだまらぬなのよの月
六月のついでこのころに、はたおりといふむしのなきけるをきき 江侍 從

七四風ふけばしどろにみゆるくずのはのかけきだまらぬなのよの月
六月のついでこのころに、はたおりといふむしのなきけるをきき 江侍 從

七五風ふけばしどろにみゆるくずのはのかけきだまらぬなのよの月
六月のついでこのころに、はたおりといふむしのなきけるをきき 江侍 從

七六風ふけばしどろにみゆるくずのはのかけきだまらぬなのよの月
六月のついでこのころに、はたおりといふむしのなきけるをきき 江侍 從

七七風ふけばしどろにみゆるくずのはのかけきだまらぬなのよの月
六月のついでこのころに、はたおりといふむしのなきけるをきき 江侍 從

七八風ふけばしどろにみゆるくずのはのかけきだまらぬなのよの月
六月のついでこのころに、はたおりといふむしのなきけるをきき 江侍 從

七九風ふけばしどろにみゆるくずのはのかけきだまらぬなのよの月
六月のついでこのころに、はたおりといふむしのなきけるをきき 江侍 從

八〇風ふけばしどろにみゆるくずのはのかけきだまらぬなのよの月
六月のついでこのころに、はたおりといふむしのなきけるをきき 江侍 從

八一風ふけばしどろにみゆるくずのはのかけきだまらぬなのよの月
六月のついでこのころに、はたおりといふむしのなきけるをきき 江侍 從

八二風ふけばしどろにみゆるくずのはのかけきだまらぬなのよの月
六月のついでこのころに、はたおりといふむしのなきけるをきき 江侍 從

八三風ふけばしどろにみゆるくずのはのかけきだまらぬなのよの月
六月のついでこのころに、はたおりといふむしのなきけるをきき 江侍 從

八四風ふけばしどろにみゆるくずのはのかけきだまらぬなのよの月
六月のついでこのころに、はたおりといふむしのなきけるをきき 江侍 從

八五風ふけばしどろにみゆるくずのはのかけきだまらぬなのよの月
六月のついでこのころに、はたおりといふむしのなきけるをきき 江侍 從

金葉和歌集卷第三

秋部 百四十七首

百首歌の中に立秋の心をよめる 春宮大夫公実

百首歌の中に立秋の心をよめる 春宮大夫公実

百首歌の中に立秋の心をよめる 春宮大夫公実

百首歌の中に立秋の心をよめる 春宮大夫公実

百首歌の中に立秋の心をよめる 春宮大夫公実

宗延法師

右兵衛督伊通

藤原朝隆

七夕のころをよめる

田家早秋といへる事をよめる

藤原朝隆

三三 あまの川きみわたりなばかさぎのはしうちみだるなみもたたなん

二五 いなばふくかぜのおとせぬやどならばなににつけてか秋をしらし

藤原朝隆

三六 たなばたのこけのころをいとはずは人なみなみにかもしてまし

二五 山ふかみとふ人もなきやどなれどそものをだに秋はきにけり

藤原朝隆

三三 七ひさのうきつなみにふなですころのうちをおもひこそやれ

二五 師賢朝臣のむめづに人まかりて、田家秋風といへる事をよめる

大納言経信

三三 七月七日、ちちのぐに侍りけるとしよめる

二五 三か月の心をよめる

大納言経信

三八 ふちころもいみもやするとたなばたにかかぬにつけてぬる袖かな

二五 大納言経信

大納言経信

三三 たなばたのころをよめる

二五 三か月の心をよめる

大納言経信

三三 こひこひてこよひばかりやたなばたのまくらにちりのつもらざるらん

二五 三か月の心をよめる

大納言経信

三三 こひわたるなみだのふちとなりはてあふせまれなるあまのがはかな

二五 三か月の心をよめる

大納言経信

三三 あまのがはわかれにむねのこがればかへきのふねはかちもとられず

二五 三か月の心をよめる

大納言経信

三三 こひわたるなみだのふちとなりはてあふせまれなるあまのがはかな

二五 三か月の心をよめる

大納言経信

三三 あまのがはわかれにむねのこがればかへきのふねはかちもとられず

二五 三か月の心をよめる

大納言経信

三三 こひわたるなみだのふちとなりはてあふせまれなるあまのがはかな

二五 三か月の心をよめる

大納言経信

三三 あまのがはわかれにむねのこがればかへきのふねはかちもとられず

二五 三か月の心をよめる

大納言経信

三三 こひわたるなみだのふちとなりはてあふせまれなるあまのがはかな

二五 三か月の心をよめる

大納言経信

三三 あまのがはわかれにむねのこがればかへきのふねはかちもとられず

二五 三か月の心をよめる

大納言経信

三三 こひわたるなみだのふちとなりはてあふせまれなるあまのがはかな

二五 三か月の心をよめる

大納言経信

三三 あまのがはわかれにむねのこがればかへきのふねはかちもとられず

二五 三か月の心をよめる

大納言経信

三三 こひわたるなみだのふちとなりはてあふせまれなるあまのがはかな

二五 三か月の心をよめる

大納言経信

三三 あまのがはわかれにむねのこがればかへきのふねはかちもとられず

二五 三か月の心をよめる

大納言経信

三三 こひわたるなみだのふちとなりはてあふせまれなるあまのがはかな

二五 三か月の心をよめる

大納言経信

三三 あまのがはわかれにむねのこがればかへきのふねはかちもとられず

二五 三か月の心をよめる

大納言経信

三三 こひわたるなみだのふちとなりはてあふせまれなるあまのがはかな

二五 三か月の心をよめる

大納言経信

三三 あまのがはわかれにむねのこがればかへきのふねはかちもとられず

二五 三か月の心をよめる

大納言経信

三三 こひわたるなみだのふちとなりはてあふせまれなるあまのがはかな

二五 三か月の心をよめる

大納言経信

三三 あまのがはわかれにむねのこがればかへきのふねはかちもとられず

二五 三か月の心をよめる

大納言経信

三三 こひわたるなみだのふちとなりはてあふせまれなるあまのがはかな

二五 三か月の心をよめる

大納言経信

三三 あまのがはわかれにむねのこがればかへきのふねはかちもとられず

二五 三か月の心をよめる

大納言経信

三三 こひわたるなみだのふちとなりはてあふせまれなるあまのがはかな

二五 三か月の心をよめる

大納言経信

三三 あまのがはわかれにむねのこがればかへきのふねはかちもとられず

二五 三か月の心をよめる

大納言経信

三三 こひわたるなみだのふちとなりはてあふせまれなるあまのがはかな

二五 三か月の心をよめる

大納言経信

三三 あまのがはわかれにむねのこがればかへきのふねはかちもとられず

二五 三か月の心をよめる

大納言経信

三三 こひわたるなみだのふちとなりはてあふせまれなるあまのがはかな

二五 三か月の心をよめる

大納言経信

三三 あまのがはわかれにむねのこがればかへきのふねはかちもとられず

二五 三か月の心をよめる

大納言経信

三三 こひわたるなみだのふちとなりはてあふせまれなるあまのがはかな

二五 三か月の心をよめる

大納言経信

三三 あまのがはわかれにむねのこがればかへきのふねはかちもとられず

二五 三か月の心をよめる

大納言経信

三三 こひわたるなみだのふちとなりはてあふせまれなるあまのがはかな

二五 三か月の心をよめる

大納言経信

三三 あまのがはわかれにむねのこがればかへきのふねはかちもとられず

二五 三か月の心をよめる

大納言経信

三三 こひわたるなみだのふちとなりはてあふせまれなるあまのがはかな

二五 三か月の心をよめる

大納言経信

二六 あづまちはるかにいづるもち月のこまにこよひやあふさかのせき
二六 八ひくこまのかげをならべてあふさかのせきちを月もこゆるなりけり
二六 さやけさはおもひなしかと月かぎをこよひとしらぬ人にとはばや
二六 九月あるとし八月十五夜をよめる
二六 秋はなほのこりおほかるとしなれどこよひの月のなこそをしけれ
二六 水上に月をよめる
二六 七くものなみかからぬさよの月かぎをきたきはうつつしてぞ見る
二六 対月厭雲といへる事をよめる
二六 七さやかなる月をかくせるくもなればこころなきやたつにやあららん
二六 八月十五夜の月のころをよめる
二六 三いつとなくおなじそらく月なれどこよひをはれとおもふなるべし
二六 九月十三夜閑見月といへる事をよめる
二六 源俊頼朝臣
二六 すみのほろころやそらにはらふらん雲のちりぬ秋の夜の月
二六 住吉にまゐりてかへきにながらのわたりにとまりて、旅宿月とい
二六 心をよめる
二六 藤原有業
二六 五たびねするなにはの浦のとまやかたもろ心にもやどる月かな
二六 経長朝臣かつらの山庄にて、人人歌ふみけるによめる
二六 大納言経信
二六 六こよひわかれかつらのさとの月をみておもひのこせることのなきかな
二六 承暦二年内裏歌合に月をよめる
二六 春宮大夫公実
二六 七くもりなきかぎをとめばやまのはにいろとも月をしまざらし
二六 河原院歌合に、月かぎ漏宿といふ事をよめる
二六 読人不知
二六 八あめならぬとしのふるにもわがやどは月もるばかりあれにけるかな
二六 題不知
二六 平光俊
二六 九ななにゆゑにあだうき世とおもひけんさてはこよひの月をみましや
二六 宇治前太政大臣家歌合に月をよめる
二六 皇后宮摂津
二六 〇てる月のひかりさえゆくやとなれば秋の水にもつららにけり
二六 源俊頼
二六 一山のはにくものころもをぬぎすててひとりも月のたちのほろかな
二六 水上月といふ事を
二六 摂政左大臣
二六 二あしねはひかつみもしげぬま水にわりなくやどる夜の月かな
二六 宇治前太政大臣家歌合に月をよめる
二六 一宮紀伊
二六 三かがみ山ねよりいづる月なればくももなくかぎをこそみれ
二六 雲居寺歌合によめる
二六 藤原康貞女